

佐藤清郎著(以文社・25002円)

戯曲『かもめ』、小説『谷間』などで知られるロシアの文豪アントン・チェーホフ(一八六〇—一九〇四)についての論考を収めた一冊だ。著者は一九二〇年生まれ。『チェーホフの生涯』(一九六六)以来、半世紀に及ぶチェーホフ論の最新刊だ。

原野の鉄道建設の現場に立つペシミズムの学生、中年の鉄道技師の応酬を描く短編『ともしび』に注目。

「結局、この世のことは何も分らないんだ」ということばまでを、注意ぶかくたどっていく。自然法爾(親鸞)と自然法則(チェーホフ)の対比も、これまでにない独自の視点だ。

チェーホフが愛読したストア学派の哲学者マルクス・アウレリウスの『自省録』のことばなども引きながら、従来の自他の作家像を確認。チェーホフの心に寄り添う姿勢と、穏やかな語りが印象的だ。

名訳者・神西清のみずからの美学が反映したチェーホフ観については、そうではなく、「もっと風通しのいい」ものである。チェーホフは「公正、真実、自由、美」を求めつづけたと著者は記す。個々の作品像ではなく、どこまでも全体像のために作品のことばを見つめていく。それがこの本の魅力である。(門)